

ラムを提唱しているイギリスのエディンバラ学派による科学の社会的機能のラジカルな分析にみられる方法論である。」

昔読んだ、分裂症患者の書いた文章を思い出した。これは一体日本語であろうか。概念を提示せず、カタカナ技術用語を頻出させ、取り入れたばかりの知識をひけらかし、文章が生硬で、論理が飛躍する。自分たち以外の学派の研究者に理解、納得させる意図も能力もない悪文で、東大大学院生を中心とした若手が、このような作文を書くとは非常に残念である。また、編者はどの程度、この作文に対し干渉したのだろうか。編者は「裸の王様」も見破ることのできない、権威に従順な大人であってはならない。

他の七論文は、史料に基づいたオーソドックスな論文で、信頼に値する。

(石田 純郎)

〔シーボルト記念館・長崎市鳴滝二一七―四〇、電話〇九五八一―二二一〇七〇七、一九九六年三月、A5判、二八七頁、二、二〇〇頁〕

唐沢信安著

『済生学舎と長谷川 泰―野口英世や

吉岡弥生の学んだ私立医学校―

いまから半世紀ほど前では、街なかの開業医には未だ医師開業試験に合格した老先生方が居られた。この方々はどのような訳か、「検定医」と云われていたような気がする。

いわゆる第一線の医療を明治十年代から七十五年近くも守り続けてこられた医術開業試験合格の臨床医の方々は、大半が済生学舎の出身と聞き及んでいる。

明治九年、西洋医学を習得した開業医の急速な養成がのぞましいとする社会的要請にこたえて、長谷川泰が開設した私立医学校が済生学舎である。大熊房太郎(医事評論家)流に言えば、<sup>、</sup>医術開業試験を受けるためのいわば予備校のような学校<sup>、</sup>では、明治三十六年に廃校されるまでの入学者は、二一、四九四人に達し、試験合格者は九、六二八人に及んだという。

このように国民医療に大貢献した済生学舎も、つい二十年ほど前は、本郷のどこにあつたか実は判然としていなかった。順天堂医院または東京医科歯科大学病院の裏手であろうという程度の認識しかなかったのである。このような問題を、ここ約十年をかけて唐沢信安先生は東京都公文書館に通い続け、更に学舎の関係資料を全国的に足で収集され、済生学舎創立百二十年目に当たる平成八年に、『済生学舎と長谷川泰―野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校―と題して一冊にまとめられ、日本医事新報社から上梓された。

この本を読ませていただいて、まず感ずることは、済生学舎創立当時の長谷川泰の情熱に負けない、唐沢先生の母校のルーツ解明に向けた情熱の激しさである。

学識すぐれ、魅力ある風格をそなえた医育者が輩出した明治期の、医育界の歴史を知らなくとも、この本を一読すれば

多くの事実を知ることが出来る。済生学舎のことは申すに及ばず、その後身である私立日本医学専門学校や東京医学専門学校誕生までの過程や、それにかかわった非常に多くの人物の行動が手にとるように書かれている。それだけでなく済生学舎でどのような人物が何を教科書にして教えていたかも知ることが出来る。

目次をひろつてみる。

第一章 長谷川 泰の生い立ち

第二章 大学東校時代の長谷川 泰

第三章 創立時の済生学舎

第四章 済生学舎の発展史

第五章 済生学舎時代の野口英世

第六章 済生学舎の女子医学教育及びその周辺

第七章 済生学舎廃校の歴史（前篇）

第八章 済生学舎廃校の歴史（後篇）

第九章 済生学舎廃校後の各種講習会及び私立東京医学

校・私立日本医学校

第十章 長谷川 泰及び済生学舎年表

第十一章 資料集

全篇の中でところどころ出てくる「官尊民卑」という言葉への思い入れと、軍医不足となった時などの行政の身勝手さが、医療政策上の考証でもう少し明確となれば、さらにすばらしいお仕事になると思う。

明治の医人も非常に遠くなつたと感じているので、みずか

ら「本郷の乞食」と称し、「本郷鎮台」とアダ名された長谷川泰の奇癖にもふれてほしかったし、済生学舎における教師の優劣さをきそわせるような講義の組合せカリキュラム（生徒は好きな教師の講義を選んで聞けた）にも先駆性を感じるのでふれてほしかった。

唐沢先生の今後の研究がさらに発展されることを祈り筆を擱く。

（中西 淳朗）

〔日本医事新報社・東京都千代田区神田駿河台二一九、電話〇三一三二九二一―五五二、一九九六年十一月、A五判、二二四頁、二、〇六〇円〕

山県郡医師会編

『広島県山県郡医師会史上・下』

本書は下巻の資料編が平成五年四月三十日に刊行され、上巻が同八年九月三十日に遅れて発行されて、本論篇となっている。それは通史編と各論編に分かれたれ、付編として医人伝と現医師会員による一人一稿となり、医事年表がつけられている。本書刊行後、広島県医師会はその速報で、上巻は一六〇号（平成八年十二月二十五日）の渡辺晋により、下巻は一四七九号（平成五年八月五日）に江川義雄により書評が紹介されているところである。

本書は広島県における一郡医師会の記録とはなっているも